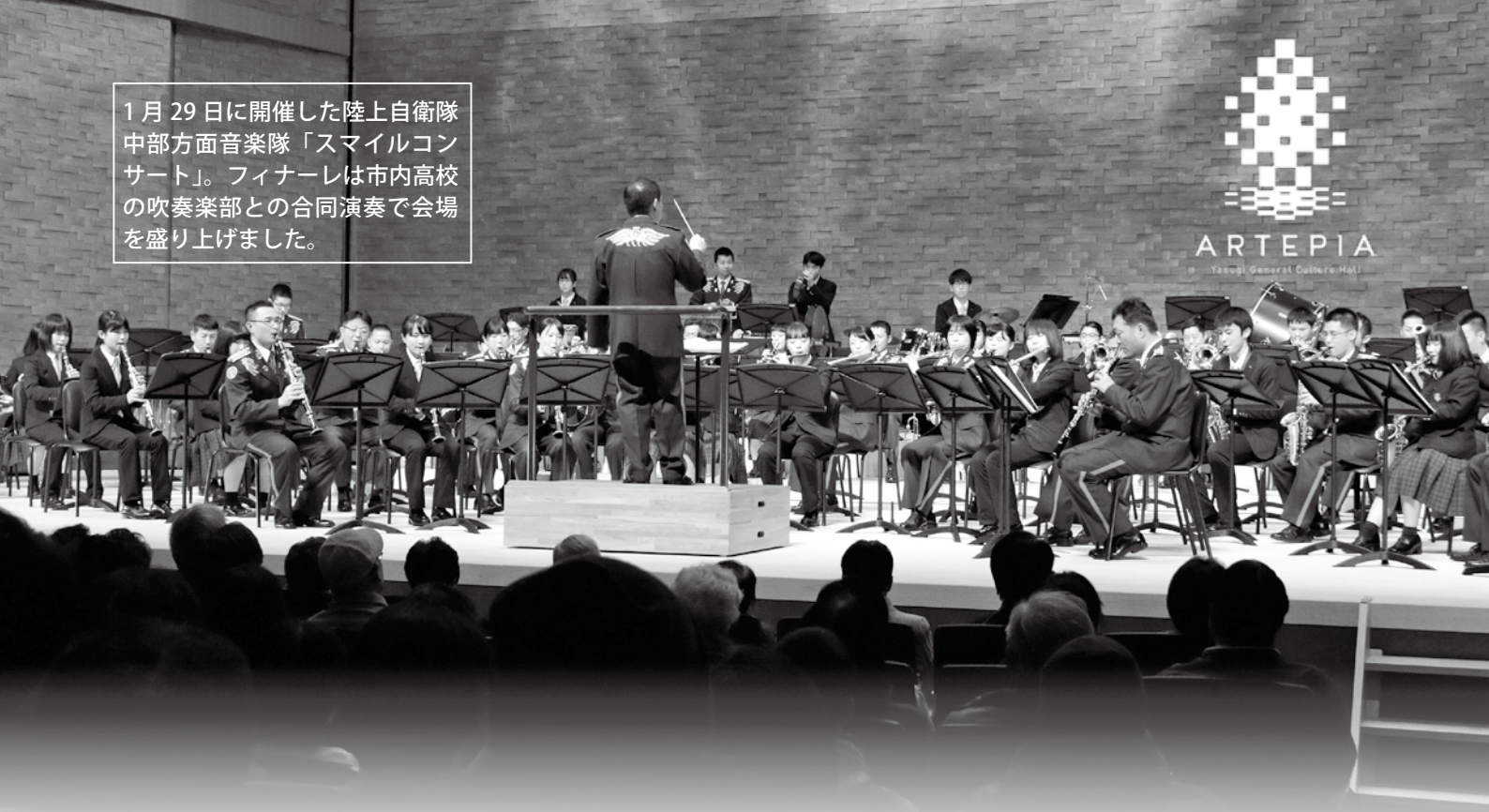


1月29日に開催した陸上自衛隊中部方面音楽隊「スマイルコンサート」。フィナーレは市内高校の吹奏楽部との合同演奏で会場を盛り上げました。

総合文化ホール「アルテピア」開館一周年

特集

開館一年と未来のアルテピア

開館後一年、アルテピアを舞台に様々な催しや取り組みが行われてきました。今回の特集では、この一年を振り返るとともに、これからも多くの人が集うホールを目指した取り組みを紹介します。

平成29年9月9日開館。地上4階建て。大ホールの収容人数は1008人。この他、小ホール・展示室・会議室・練習室・市民ラウンジなどがあります。

一年経ったアルテピア

スモークブルー色の外観が安来の風景に馴染んできた総合文化ホール「アルテピア」。昨年の9月9日に開館してから一年が経ちました。

「アルテ」は芸術を表すスペイン語とイタリア語のアルテ(arte)。そして、理想郷を表すユートピア(utopia)のピアが名前の由来です。安来市の文化・芸術の拠点となる施設であり、多くの人々に親しまれるようにとの願いが込められています。

▲大ホールは1008席。広めの座席は座り心地が良く長時間でも疲れません。

予想を上回る利用者が

「文化芸術、交流の拠点として多くの方が訪れ、活動できる場を提供することがホールの使命です」と話すのは、アルテピアの久保田孝館長。「一年目は『出会う』をテーマに事業を進めてきました。多種多様な鑑賞の場を企画したり誘致したりと、一年目は市民の皆さんに文化芸術に触れていただくことを第一としました」。

その結果、この一年間の入館者数は予想を大きく上回る約20万人。オープン効果があるとは言え、単純に計算すると安来市民が一人あたり約5回も来場したことになります。

久保田館長は「貸し館としても市民の皆さんにたくさん利用していただいています。このため大小ホール・展示室の稼働率は平日を含めて5割を超えています」と語ります。この要因の一つに施設の規模があると言います。

「イベンター(コンサート等の催行会社)にとって当館は使い勝手が良いようです。1500席以上のホールは松江・米子市にありますが、1000席規模は近隣にはあまりありません。また、小ホールの300席規模で、本格的なクラシックから展示会まで多目的に利用できるホールは山陰地方にはありませんでした。複数のホールがあり、マイカーでのアクセスも便利が良いということで、イベンターからも注目されています」。

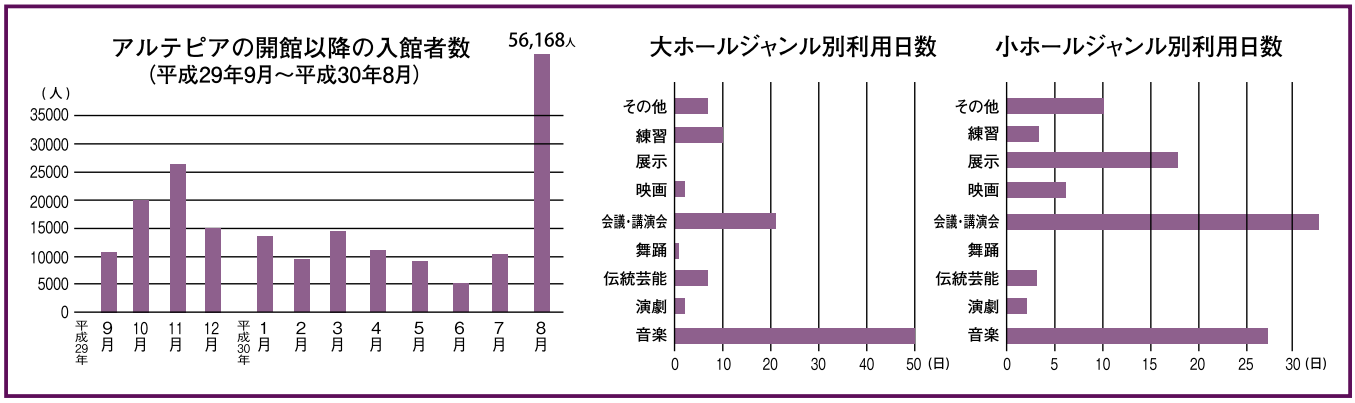
アルテピア館長
久保田 孝　さん

なかうみ交響楽団
団長　角久夫さん

評価が高いホールの音響

アルテピアの中心は1008席を有する大ホールです。特に音楽利用の場合は「音」が命。大ホールの音響について、なかうみ交響楽団の団長で、自らもバイオリンの演者である角久夫さん(市内在住)は次のように評価します。

「松江市出身で元読売日本交響楽団の古田川達男さんに演奏したときの音響の感想を聞くと『健康的な音』と表現されました。病的な音ではないというこ



とです。つまり、音が変わったりしない、ストレートな音色だということです」。

また、角さん自身も「ステージ上ではお互いの音が聞きにくいこともあるが、客席では小さな音までクリアに聞こえています。バイオリンのソロなど、しっとりとした音楽に向いていると思いますね」と明かします。

観客・ファンづくりが必要

2年目に入ったアルテピア。引き続き多くの人に利用され、にぎわいを見せていくのには何が必要なのでしょうか。

角さんは「今後は芸術に対する理解や関心のある市民や音楽ファンを育てていかなければなりません。これは、全国の文化ホールに言える課題です」と指摘します。

「先日、プレミアムカフェ（音楽試食会）と言うミニコンサートを行いました。しかもホールだけではなくロビーでも。一回、気軽に音楽を聴いてもらおうというのがコンセプトです」と、口コミで広がるような観客づくりに自らも取り組みます。

一方、久保田館長も「2年目からは『つなげる』というテーマに取り組んでいかなければならない」と、新しい文化の目を育んでいく必要性を語ります。

実際、アーティストの公演に合わせたアウトリーチ事業（※）やワークショップなどを積極的に展開し、芸術の楽しさを広げようと取り組んでいます。

※地域に出向いて普及活動を行うこと。

ホールとの新たな関わり方

アルテピアにはパートナーズ会員制度があり、現在市民を中心に約800人が登録。同館のリピーターの主力となっています。このうち約90人は、さらにナビゲート会員として登録しています。同会員は、各種公演時に、チケットの確認や入退場の誘導、公演中の見守りなどを行います。

▲来場者を誘導するナビゲート会員の古志野君子さん。

このうちの一人、古志野君子さん（市内在住）は、退職を機に社会貢献を模索していたところ同制度を知り応募しました。

「私たちはアーティストやアルテピアを利用される皆さんが気持ちよく演奏・鑑賞できるように運営のお手伝いをしています。来場者や施設の皆さんと接することで、学ぶことが多いです」とナビゲーターとしての意義を語りつつ、都合の良い時のみ参加できることも魅力の一つと話します。

「これだけの施設ができ、都会に行かなくても一流を見ることができるようになりました。市民の一人としてお手伝いすることが使命なのかなと思って

① 12月10には開館記念事業「NHKのど自慢」を開催。② 9月には市美術展を開催。③大ホール探訪ツアーの様子（5月）④小ホールでの演劇の様子（12月）⑤アウトリーチ事業の様子。ドラムタオのメンバーが小学校を訪問（11月）

▲安来節全国優勝大会は今年から総合文化ホールアルテピアに会場を移し、8月15日から行われたました。ホールの音響とアクセスの良さが参加者に好評でした。

やっています」と、安来が盛り上がっていくことに期待を寄せています。

これからのアルテピア

久保田館長は言います。「市民に愛されるホールにしていきたい」。とは言え一人一人の嗜好や考えは違います。そんな中で非日常的な空間を演出していくには一定の決まりが必要です。それを久保田館長は「質の担保」と言い切ります。一定レベルを提供することが、リピーターやファンづくり、人づくりにつながると語ります。

現在、同館では自主事業として「ハガネミュージック」をシリーズ化。国内外から一流のアーティストを招いて定期的にコンサートを開催しています。

また、「施設・設備面でもまだまだ近隣の人にアルテピアがマルチに使えることが知られていません。大小ホールや展示室があり、特に小ホールは、展示やダンス、飲食を伴うパーティーなど、幅広い使い方ができるということを提案していきたい」と、利用拡大の意気込みを語ります。

皆さんも様々な形で施設を活用してみてはいかがでしょうか。

アルテピアのロゴマークは、日本的な市松模様が、常に変化し続ける発展の揺らめきを炎で表現。常に変化し続ける芸術と、守り・発展し続ける文化を現しています。このシンボルのように、2年目・3年目に向け、私たちの心の豊かさを変化させてくれることでしょう。

一方で、私たちがアルテピアを舞台にそれぞれの豊かさを実現させていきたいものです。

▲8月26日のHAGANE MUSICは山陰初登場の「パン ノート マジック」。パンとは鋼のドラムの意味。カリブ海周辺が発祥のドラム缶でできた音階打楽器のパフォーマンス。会場全体がトロピカルな雰囲気に。

一方、ロビーの喫茶コーナーでは、HAGANE MUSICの開催時にコンサート内容に関連した特別ドリンクを販売。今回はココナッツ入りのドリンクが登場。視覚や聴覚のみでなく、味覚でも楽しむことができます。

HAGANE MUSIC 今後の予定

▼10月6日(土)　ポルカ・ドット・アコーディオン▼12月2日(日)　マリヤ・モッテンソン＆フローデ・フェルハイム

アルテピア自主事業「ハガネミュージック」

安来の文化を音楽（芸術）の側面から支えられないかと考え「HAGANE　MUSIC」は誕生しました。今年度は5回シリーズで、いずれも世界各地の伝統音楽や楽器を紹介しています。

お招きするアーティストの共通の特徴は「自国や故郷に誇りを持ち、音楽を通じてそれらを発信」していることです。伝統の音楽が途絶えることなく続いている、安来で言う鉄づくり文化に通じるものがあります。

この象徴として「HAGANE」という言葉を使い、ハガネミュージックと名付けました。このコンサートが安来の郷土愛や伝統文化を考えるキッカケになればと思っています。

これまで3回開催しましたが皆さんに好評で、リピーターが増えてきています。山陰では初公演のアーティストも出演しています。

ぜひ一度、お越しください。

アルテピア副館長
坂口寛さん